

永澤 美保 (同調的共生) 久保 孝富 (データサイエンスセンター) 菊水 健史 (社会内分泌)

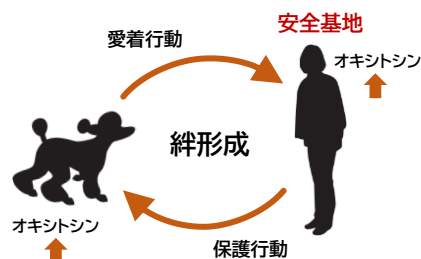
研究の背景

イヌはヒトとの共生の長い歴史の中で、ヒトに似た社会的認知能力を獲得しました。その結果、本来は同種母子間等に見られる特別な関係性「絆の形成」が可能になり、現代のような伴侶動物になったといわれています。

イヌは視線を、ヒトの幼児と同じように、飼い主からの保護行動を引き出すために利用していると考えられています。本研究は、イヌの視線が飼い主の情動を変化させ、社会的に機能しているか明らかにすることを目的としています。



イヌはヒトと同じように視線や見つめあいを利用してコミュニケーションをとることができます



イヌは安心を得るために飼い主を見つめ、イヌに見つめられることで飼い主のオキシトシン分泌が促され、絆が形成されると考えられます。

アプローチ

- ・ イヌが飼い主と一緒に過ごしている時の動画を見て行動解析を行います。
- ・ すでに解析済みの自律神経活性の指標と行動の関連を調べます。
- ・ イヌが飼い主を見たときに、飼い主の交感神経活性が変化するかを調べます。



期待される結果

- ・ 行動実験の方法や、心拍変動解析と自律神経による情動評価の方法を身に付けることができます。
- ・ この研究はたくさんのイヌの飼い主の協力のもとに、研究室の大学院生や学部生と一緒に進めます。そのため、自分自身の目標と全体の目標をしっかりと認識したうえで取り組む必要があります。研究室ゼミに参加したり、教員や仲間との議論を積極的に行うことで、論理的な思考方法やプレゼンテーション能力を身に付けることができます。

募集方法

- ・ 地道な努力が必要な実験です。自己管理ができる方を募集します。
- ・ データ解析と考察の知識を得るために、研究室のゼミに積極的に参加してください。
- ・ 詳細についてはメールでお問い合わせください (nagasawa@azabu-u.ac.jp)